
 学 会 記 事

第 79 回新潟内分泌代謝同好会

日 時 平成 15 年 4 月 19 日 (土)
午後 2 時～
会 場 新潟ワシントンホテル

I. 一 般 演 題

1 右大腿内転筋内膿瘍を伴った糖尿病の 1 例

境野晋二郎・松山 優子・大山 泰郎

谷 長行

新潟県立がんセンター新潟病院内科

右大腿内転筋内膿瘍を伴った糖尿病の 1 例を経験したため報告する。

〔症例〕59 歳男性。右大腿内側部痛にて発症。MRI にて腫瘍性病変を指摘され精査のため当院整形外科に入院した。入院時検査で糖尿病と診断される (FBS 183, HbA1c 11.0 尿ケトン+)。2/12 に生検術施行。手術所見は膿瘍 (起炎菌黄色ブドウ球菌) のためドレナージ後、抗生剤投与となった。周術期はインスリン治療を要したが、炎症の改善と共に血糖が改善し、グリメピリド 1 mg のみで退院した。感染経路としては歯肉炎、深爪、胆道感染などが考えられた。

【考案】通常筋組織は敗血症などの場合にも冒される事は少ない。筋肉内膿瘍を認めた場合には基礎疾患として糖尿病の存在を考える必要がある。

2 下垂体前葉機能低下を来した tuberculum sellae meningioma の 1 例

田村 哲郎・土田 正・関 康弘

大野 秀子・田中 隆一*・妻沼 到*

新潟県立中央病院脳神経外科

新潟大学脳研究所脳神経外科*

成人の下垂体機能低下の原因は下垂体腺腫が最も多いが、髄膜腫は稀である。我々は視力障害で発症し、汎下垂体機能低下に陥った症例を経験したので報告する。

症例は 42 歳の女性。約 10 年前左視力低下で発症、その後無月経、全身倦怠、寒がり、体重減少となり他科を受診し当科に紹介。身長 158cm、体重 51.5kg。右視力 0.8、耳側半盲、左は盲であった。CT では鞍上部にやや高吸収の mass を認め、著明かつ均一に増強された。MRI では dural tail sign と blistering を認めた。内分泌学的には F の基礎値、DHEA-S、UFC は低値。ITT に F は 14.8 まで上昇。CRH に ACTH は 250pg/ml、F は遅延反応を示した。fT3、fT4 は低値で PRL: 65ng/ml と軽度上昇。GH は ITT に全く反応せず。手術で髄膜腫と確認された。鞍結節髄膜腫は比較的少ない腫瘍で、過去 25 年の 18 例には下垂体機能低下および高 PRL 血症の症例はなかった。本例では視床下部 (下垂体柄) 障害による下垂体機能低下と考えられた。

3 Preclinical Cushing syndrome の 2 例

佐々木英夫・阿部 英里・里方美智子

信田 慶太・笹川 亨・木村 元彦

新潟こばり病院糖尿病センター

症例 1 : 59 才, 女性. 症例 2 : 55 才, 女性.

両例共高血圧、糖尿病で加療中。いずれも腹部疼痛のため入院。腹部 CT で偶然副腎腫瘍を発見。Cushing 特有の身体所見なし。血圧 165/100 と 162/92, HbA1c 8.8 % と 7.9 %。血中 cortisol は正常範囲であるが日内変動消失、ACTH は低値。Dexa 2mg, 2 日間の抑制試験陰性。下垂体系、副腎髄質ホルモン正常。第 2 例で PAC 高値に対し PRA 低値を示し、aldosteronism の合併が推測さ